【無料配布】短編ミステリ

～文学フリマ東京40のための書き下ろし～

許されざるいのち

作：庵字　原案：『殺人遺伝子』（菱川あいず 著）より

・二〇四〇年、殺人、放火、強盗、強姦、という凶悪犯罪をした者について共通したＤＮＡ配列が見られることが発見され、これを「殺人遺伝子」と名付けた。
・日本全国の刑務所収容者に対して行われた検査により、凶悪犯罪者の二割、死刑判決を受けた者の三割が「殺人遺伝子」を有していることが明らかにされた。
・他方、国民全体が有している「殺人遺伝子」の比率は〇．〇四％である。
・これにより、国民に強制的に遺伝子検査が実施され、「殺人遺伝子」保有者は留置施設に送られ安楽死させられる「殺人遺伝子撲滅法」が制定される。
・のちに強制遺伝子検査に猶予期間が与えられ、一六歳になるまでＤＮＡ検査義務が免除されることとなる。

「間違いないのか？」
警視庁捜査一課刑事、芝原（しばはら）は、コンビを組む緑川（みどりかわ）を向いた。
「確度は高いと思います。この椿涉（つばきわたる）くん――」と緑川は、自分のスマートフォンの画面を指さし、「は、一学期の途中から不登校になり、ほぼ自宅に引きこもった生活を送っているといいます。ですが……」
「ここひと月で、三度も街頭に設置された防犯カメラに映っている」
「ええ。しかも……すべて、犯行のあった日時の前後に」
緑川はタッチパネルをフリックし、コピーした防犯カメラの静止画を何枚か表示させていく。さほど解像度は高くないながらも、そこに捉えられた人物は、背格好、髪型、人相などから、椿涉と認識するに十分な特徴を備えていた。
「服装も、彼が着用していたものと一致していると、中学校時代の同級生数名から証言も得られています。加えて……動機もあります」
ここ一ヶ月のあいだに、都内の某区で立て続けに三件の殺人事件が起きた。被害者は、区内の高校に通う男子生徒が二名と、同じ高校に勤務する教師一名の計三名。警察は高校関係者を中心に捜査を進め、ひとりの男子生徒を最有力容疑者として浮かび上げた。
「この、椿涉くんは、一学期半ばからいじめに遭い始めています。不登校になったのも、それがきっかけで間違いないでしょうね。で、そのいじめの主犯格だったのが、殺された二名の男子生徒でした。いじめの事実を学校側が隠蔽していたから、被害者と椿くんとを結びつけるのに時間がかかってしまいました。殺された教師は、椿くんのクラスの体育担当で、運動が苦手な椿くんは、授業でその教師から、かなりきつめの〝指導〟を受けていたようです」
「なるほどな。だがな……」
芝原は、緑川のスマートフォンを逆方向にフリックし、椿涉の写真――生徒名簿掲載用に撮影された、制服姿のバストアップ――を再び表示させると、
「やるか？　こんな、虫も殺さないような顔をした坊ちゃんが。犯行手段は三件とも、鉄パイプで執拗に体全体――特に頭部――を殴りまくっての撲殺だ」
「それだけの恨みがあったということなんじゃないですか？」
「だったとしてもだ……。俺の経験から言わせてもらえれば、この犯行――殴り方には、いっさいの躊躇や迷いというものが見られない」
「相当の覚悟がなければ出来ない犯行、ということですか」
「覚悟、というか、ざっくばらんに言えば、やぶれかぶれ、って感じだな。この犯行からは、犯罪を隠蔽しようだとか、犯行後うまく逃げ延びてやろうだとかいった、そういった犯人の思惑が感じられないんだ」
「そこのところの事情は、椿くんに直接訊いて確かめましょう」

「いない？」
椿涉の家を訪れた芝原と緑川は、応対に出た父親からその不在を告げられた。
「ええ」と父親は、「私も妻も、部屋にいるのかと思っていたのですが……」
時刻は平日の夜。不登校でなくとも、高校生が外出している時間ではない。
「あの子、最近おかしいんですよ」
父親の背後から声がかけられた。母親からのものだった。
「気の弱い子供だったのに、最近、妙に怖い目をするようになって……」母親は、ため息をつくと、「だから、私は反対したんですよ。翔（かける）のほうにしようと――」

「おい！　やめないか！」
父親からの一喝を受けて、母親は急に口をつぐんだ。
「……『かけるのほう』？　何のことですか？」
芝原の追求に、両親は口を割った。
椿渉は、椿家の実の息子ではなく、養護施設から引き取った養子だった。椿夫妻が養子を迎える際、二人の男子が候補にあがっていた。渉と翔という双子で、同時期に椿夫妻と同じように男子の養子を求めていた夫婦があったこともあり、双方は話し合いの末、それぞれが双子のひとりを養子に迎え入れることになった。
「そして、椿家に引き取られたのが、渉だった……」覆面パトの助手席で、芝原は、「しかし、その渉はどこに消えたんだ？　まさか……第四の犯行に及ぶつもりなのか……。調べによれば、椿渉が恨みを持ちそうな生徒や教師は、もう――」
「――います、ひとり」手帳を広げていた緑川は、「椿くんは、ある同級生に片思いをしていたらしいのですが、最近、その相手が別の男子生徒と付き合い始めた、という情報を生徒から聞き込みました」
「恋敵、ということか」
「……その男子生徒の住所も分かっています。行ってみましょう」
緑川はエンジンを掛けて覆面パトを発車させた。

男子生徒の自宅へ向かう途中、悲鳴を耳にして緑川はブレーキペダルを踏んだ。
「――あの公園からだ！」
停車するよりも早く助手席から飛び降りた芝原は、夜の公園へ走り出す。
「――やめろ！」
芝原の一喝で、振り上げられた鉄パイプがピタリと停止した。
「……椿渉だな」
名前を呼ばれ、鉄パイプを手にした少年――椿渉は、ゆっくりと振り返る。その足下には、体中を震わせてへたり込む男子生徒の姿があった。――が、椿が動きを止めたのは一瞬だけだった。月光に煌めく鉄パイプが振り下ろされ――
銃声が夜のしじまに響き、鉄パイプが地面に転がった。椿は血の滲む右肩をおさえ、その場にうずくまる。すぐさま駆け寄った芝原は、渉から銃口を外さないまま、地面に落ちた鉄パイプを椿の手の届かない位置まで蹴り飛ばした。
「……殺せ」椿の唇から声が漏れる。「どうせ……死ぬんだ……」
「……どういう意味だ？」
「〝殺人遺伝子〟だね」ようやく追いついた緑川が、息を整えつつ声をかける。
「椿渉くん、君は、施設で一緒だった双子の兄弟、翔くんと、今も密かに連絡を取り合っていたんだね。そこで、君は知ってしまったんだ……遺伝子検査の結果、翔くんが〝殺人遺伝子保有者〟だったということを……」
「双子の兄弟……あっ！」
声を上げた芝原に頷いて、緑川は、
「そうなんです。渉くんと翔くんは、一卵性双生児だった。一卵性双生児は……二人ともがまったく同じ遺伝子情報を持っている。つまり、検査を受けずして渉くんは、自分も殺人遺伝子を保有しているのだと知ってしまったんです」
「……どうせ……殺される運命なら……」
笑み浮かべた渉の頬を、ひと筋の涙が伝った。

『高校生二名と教師を殺害した犯人は殺人遺伝子保有者の少年』
との見出しが躍る新聞を捨てるようにデスクに投げると、芝原は、
「ひでえ話だ」
ふう、とため息をついた。
「本当ですよね」と近づいてきた緑川は、「渉くんが犯行に及んだ理由は、自分が殺人遺伝子保有者だと知ったからです。それまでの渉くんは、それこそ虫も殺さないような大人しい少年だった……」
「この国に生まれた人間は、〇．〇四％の確率で生まれながら死ぬことが決まっている……」
夕日に暮れゆく街並みを眺めながら、芝原はもう一度深く嘆息した。
（了）

お読みいただきありがとうございます。「**C―51、52**」「**新生ミステリ研究会**」にて出店しております。この短編の設定元である長編ミステリ『殺人遺伝子』も販売しております（価格：千円）。
お立ち寄りいただければ幸甚です。

新生ミステリ
研究会
ホームページ